

V・E・フランクルにおける「幸福」「愛」「働くこと」の人間学的一考察

広岡義之

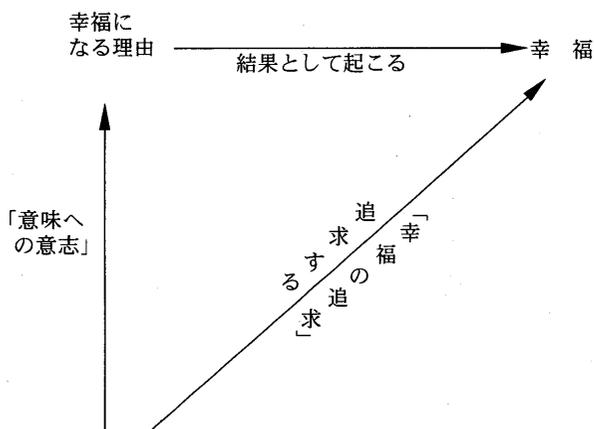
第一節 問題の所在

〈フランクルが把握する「自己実現」とは?〉

フランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) は、自らの「自己実現」理解について次に述べている。自己実現は人間の究極の目的ではない。自己実現はそれ自体が目標にされた瞬間から、人間存在の自己超越性と矛盾し始める。自己実現は幸福と同様、意味充足の結果である。その点をフランクルは次のように説明している。「人間が世界の中で意味を充足する限りにおいてのみ、人間は自己を充足するのである。もし人間が意味を充足するのではなく、自己を実現しはじめるならば、自己実現はただちにその正当性を失ってしまう。」^①と。その意味で、「自己実現」は人生の志向性の無意味の結果なのである。すなわち「本当の自己実現や生きがいは、直接的な自己主張によってではなく、自己以外の他の者または物に我を忘れて専念するという迂路を通じてのみ達成される」とフラン

クルは考えているのである。

〈自己実現の直接的追求もまた自己実現の妨げとなる〉



図①

上述のように「自己実現は幸福と同じように意味充足の結果である」とフランクルは述べているが、これはどういうことを意味するのだろうか。この「図①」において、「幸福」とは意味への意志、すなわち意味と目的(幸福に

なる理由)を発見し、それを充実させる人間の努力により、結果として起こることが示唆されている。幸福の直接的追求が結果的には幸福の妨げになるように、自己実現の直接的追求もまた自己実現の妨げとなるとフランクルは警鐘を鳴らすのである。なぜなら自己実現もまた自己の生の意味と目的(使命)を発見し、これを行為に移して起こるものだからである。

そこでフランクルは言う。「一般に人間の現存在において自己充足や自己実現が問題になる場合、それらはただ結果として達せられるのであって、意図してではありません。われわれが自分をゆだね、われわれが専心し(中略)われわれの生活のなかへ投げかけられる任務や要請に献身するその程度にに応じてのみ、(中略)われわれはわれわれ自身をも充足し、そして実現するのです」。

〈「幸福」「愛」「働くこと」というテーマを「自己超越」概念に即して考察する〉

われわれは上述のように、「自己実現は人間の究極の目的ではなく、幸福と同じように意味充足の結果である」という視点に立つて、以下の第二節では「幸福」であることの根拠を問うことにより、それが、「自己超越性」と深く関連することを浮き彫りにしてみたい。そして続く第三節では「愛する」という現象を人間学的に考察することによって、それがいかに「自己超越性」と関連しているかを傍証する。最終節の「働くこと」においても、「自己超越性」の視点が深く関わる。なぜなら、「自己超越性」には、自己を引き

渡す対象(仕事・職業が必要とされるからである。いずれにせよ、小論において、フランクルの「自己超越性」という概念を軸に、現代人にとって重要課題である「幸福」「愛」「働くこと」というテーマを任意に設定し、それらに共通する人間学的課題を深めてゆくことにする。

第二節 「幸福」であるということ

一、人は「幸福」を追求することができるのか？

〈「快樂原理」の自己破壊的性質が「神経症」を生み出す〉

フランクルによれば、「快樂原理」は自己破壊的である。なぜなら人間が快樂を求めれば求めるほど、その目標は失われることになるからである。「幸福の追求」そのものによって、皮肉なことに「幸福」は妨げられてしまう。「快樂原理」のこの自己破壊的性質は、神経症的傾向を生み出すことになる。反対に人間生活が正常に営まれている場合、「快樂」は人間の努力の目標ではなく、目標達成の結果となっている。目標を達成した後、自然発生的に「幸福」が結果として起こるのであり、その意味でいえば、「人は幸福を追求することができるのでないのである」。(傍点筆者)これが「図①」の意味するところである。

〈「地位衝動」も自己破壊的なものである〉

フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)が精神分析的立場から

ら「快樂原理」を強調したように、個人心理学的立場からアドラー (Alfred Adler, 1870-1937) は、「地位衝動」を強調した。しかしこの「地位衝動」という望みもまた、それを持つ人が、おそかれはやかれ「地位追求者」として見捨てられることになり、結果的には、「地位衝動」も自己破壊的なものとならざるをえない。

この事実を理解しやすくするために、フランクルは自分自身の例を引き合いにだして次のように述べている。フランクルはこれまで一六冊の著書を出版してきたが、結局、一番、評判や成功から遠いと思われた『人間の意味探究』(邦訳名『夜と霧』)こそが、結果として自らの著作のなかで世間から一番評価され注目されることになった。このときの経験から、若い執筆者に対して、フランクルは、自分の信念や良心に従って、執筆活動をすべきであり、はじめからけって成功を氣遣うべきではないと助言している。人が「成功」を氣にしなければいほど、結果として、「成功」や「幸福」は生起しやすいのである。

〈快樂〉は人間の努力の目標であるよりも、むしろ意味充足の結果である

アドラーのいう「地位衝動」あるいは「権力への意志」と、フロイトのいう「快樂原理」あるいは「快樂意志」と呼ばれるものは、人間の意志の派生物にすぎない。ここで「意味への意志」とは、意味と目的を発見し充足することである。「快樂は人間の努力の目標であるよりも、むしろ本当に意味充足の効果である。そして、権力

はそれ自体目標であるよりも、むしろ本当に、目標への手段である」。

〈意味充足〉が阻止されたとき、人は「権力」で満足するか「快樂」を意図する

もちろん、ある程度の権力、たとえば経済的な権力は、われわれが日常生活を円滑に進めてゆくために、欠くべからざる必要条件である。しかしながら「意味充足という本来の関心が阻止されたときのみ、人は権力で満足するか快樂を意図する」ようになる。

ここで重要なのはフランクルの次の説明であろう。「幸福と成功はともに充足の単なる代用物であるし、そのことが、快樂原理ならびに権力への意志が意味への意志の単なる派生物であるということの理由である。快樂原理ならびに権力への意志の形成は、人間の本来の動機づけの神経症的歪曲に基づいている」。(傍点筆者)

二、幸福と自己実現

〈現代社会で散見される「自己実現」への過剰な関心——ブーメランの比喩——〉

フランクルは、現代に見られる「自己実現」への過剰な関心を「意味への意志」のフラストレーションに由来するものと考えている。自己の生における意味と目的・使命が不明なために欲求不満が生じ、そのためにますます現代人は「わたしのやりたいこと」にこだわろうとする。この状況をフランクルはブーメランの比喩を使用⁽⁹⁾して見事に説明している。オーストラリアの原住民が使用するブー

メランの本来の目的は、獲物に当てることである。手元から離れたブーメランが戻ってくるということは、目的が達成されず、獲物に当たらなかった証拠である。それゆえ、「獲物に命じたブーメラン」とは、比喩的に、自己の使命に対して、行為で応答し自己が実現され、真の充足が得られた結果を意味する。「ブーメランが、的をはずれた場合にのみ投げ手のもとにもどってくるように、人間もやはり、自分自身の使命を見失った場合にのみ、自分にもどってきて自己実現しようとする」。(傍点筆者)

〈「至高体験」「健康」「良心」もまた結果として起こるものである〉

快樂と幸福について言えることは、マズロー(Abraham Harold Maslow, 1908-1970)のいう「至高体験」についてもあてはまる。

「至高体験」もまた結果として起こるものであって、けっして追求されえない¹⁴。「実際には、人間は快樂や幸福それ自体を求めるのではなく、個人的な意味の充足であれ、人間との出会いであれ、結果として快樂や幸福を引き起こす」(傍点筆者)¹⁵のである。追い求めることはできず、結果として生じてくる現象の中には、「健康」と「良心」も属する。もしわれわれがよい「良心」を持つと努力すれば、もはやそれを持つことは正当ではなくなるとフランクルは言う。よい「良心」を持つとするとその事自体が、われわれを「偽善者バリサイ人」にしてしまうのである。またわれわれが「健康」を第一義にしてしまうと、われわれは即座に病気の危険性を孕むことになってしまおう¹⁶。

〈ソロモンの知恵と栄華の物語〉

快樂、幸福、自己実現、至高経験、健康、そして良心などを追求めることに内在する「自己破壊性」を回避し、健全な生き方が成された好例を、われわれは以下に見出すことができよう。それは、旧約聖書の列王記(上)に記されている、「ソロモンの知恵と栄華」の物語である。ソロモンは自分の即位を祝うために、ギベオンの聖所に行き、燔祭を主に捧げた。その夜のことである。主がソロモンの夢に現れて、彼が求める物は何でも与えようと言われた。父ダビデの位を継ぎ、まだ年若くして王国を治めなければならなかったソロモンは、その責務を果たすために、民を正しく裁く知恵を主に求めた。そのことが主の御意にかなひ、主は、ソロモンの求めた知恵だけでなく、富と栄誉と長命をも与えて、最も偉大なる王となることを約束されたのである¹⁷。

以下は該当する旧約聖書「列王記上、三章一〇節〜一四節」からの引用である。「あなたは自分のために長寿を求めず、富を求めず、また敵の命も求めることなく、訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた。見よ、わたしはあなたの言葉に従って、今あなたに知恵に満ちた賢明な心を与える。あなたの先にも後にもあなたに並ぶ者はいない。わたしはまた、あなたの求めなかったもの、富と栄光を与える。生涯にわたってあなたと肩を並べうる王は一人もいない。もしあなたが父ダビデの歩んだように、わたしの掟と戒めを守って、わたしの道を歩むなら、あなたに長寿をも恵もう¹⁸」。こうしてソロモ

ンは、自ら得ようと思っていなかった贈り物を神から授かったのである。フランクルの解釈によれば、このソロモン王の物語は、「自己実現は人生の志向性の無意図的結果である」というテーゼの模範的な具体例となっている。¹⁹⁾

第三節 「愛する」ということ

一、「愛」に関わる三つの態度

〈第一の「性的な態度」〉

フランクルは「愛」への態度を三つに区分して論じている。第一の態度は、人間の身体的な層に対する「性的な態度」である。これは「他の人間の身体的な現象から性的な刺激が生じ、それが性的な態度をとった人間のうちに性衝動を触発させる²⁰⁾」のである。この肉体のレベルだけに留まってしまえば、けっして精神を満足させることはできず、人間は欲求不満に陥ってしまう。²¹⁾

〈第二の「エロティックな態度」〉

第二の態度は、人間の心理的な層に対応する「エロティックな態度」である。これは単なる性的興奮以上のものである。このエロティックな態度をとった人間は、「単に性的な態度をとった人間よりもより深く相手のうちに入りこみ、他者の心理的な構造へと迫るのである。(中略) この型の態度は通俗的に恋とよばれる²²⁾」。この「エロティシズム」はあくまでも一時的なもので、相手の心理面に

入り込むものの、パーソナリティを理解するところまでは到達しない、いわゆる「恋の虜」になる状態を指す²³⁾。単なる「性的な態度」は、相手の身体性を指向するにすぎないが、これに対して「エロティックな態度」は心理的なものを指向する。しかしこの在り方ではまだ他者の精神的な中核に到達できない。²⁴⁾

〈第三の「本来の愛の態度」〉

そこで最後の第三の態度こそ、本来の愛であり、それは「相手の人格構造のうちに最も深く入りこみ精神的なものに到りうる限りにおいてエロティックなもの(最広義における)の最高の形式なのである²⁵⁾。」と。この意味において、愛する者はもはや身体性や情緒性において興奮させられることはなく、その精神的な深さによって感動させられるのである²⁶⁾。この第三段階の「真の愛」に至って初めて、相手の精神的次元、つまり、パーソナリティの中核である「心」にまで到達することができる。つまり、「愛」とは相手の経験の独自性と、唯一性を、そのまま自分も同様に味わうことを意味する。²⁷⁾

〈愛の「自己超越」という道を通じて人は真の自己になる〉

もちろん、男女の愛においては、衝動性も必要であり、その逆に衝動性にも愛が求められることは言うまでもない。人間の性生活はそれがたんなる性生活以上のもの、まさに愛の生活であるときに初めて人間にふさわしいものとなる。しかし単なる享楽手段に留まる限り、それは「愛」ではないと、フランクルは指摘している。²⁸⁾ はず

れにせよ、「愛」とは、愛される対象をその唯一性において直観する能力である。この愛において、人はその対象へと自己超越することによって、同時に自己の身体と心と精神の全体を統合する。「要するに、愛の自己超越という道を通じてはじめて人は真の自己になる」⁽²⁸⁾のである。

〈一夫一婦的な態度は、性的発達の最終段階である〉

そこでフランクルは次のように結論づける。「故に真に成熟した人間は、彼が愛するときのみ初めて性的に渴望しうるのである。性的な関係は彼にとっては、性欲が愛の表現になりうるときにのみ問題となるのである。(中略)一夫一婦的な態度はしたがって性的発達の最終段階であり、性教育の最終目的であり、性倫理の理想である」⁽²⁹⁾。(傍点筆者) フランクルはマックス・シェーラー (Max Scheler, 1874-1928) を援用しつつ、本当の意味で、愛し合う二人にとって「愛」とは一夫一婦的な性質のものであり、愛する人の最高の価値へと向かう精神的行為であることを強調する⁽³⁰⁾。

二、「性」の非人間化

〈還元主義的な方法では「愛」は語れない〉

われわれが「愛」について語るとき、還元主義的な方法ではなく、人間性に重点を置いて考えなければならない。ここで還元主義とは「人間的な現象を、人間以下の現象に変造したり、また逆に人間以下の現象から、人間的な現象を導き出そうとする、偽りの科学

的手法」⁽³²⁾であるとフランクルは定義している。たとえば、「愛」というものを、人間以外の動物も共有する性衝動と本能の昇華である⁽³³⁾と解釈することもひとつの典型的な還元主義的捉え方であり、これでは人間的な現象についての真の理解には決して到達しえない。

〈「愛」とは、「自己超越性」という人間の現象の一つである〉

フランクルにとって、「愛」とは、「自己超越性」という人間の現象の一つである。「人間は、人間の本質である自己超越性のゆえに、意味の充足や愛する人との出会いに向かって自分自身を超えることにむしる根本的な関心がある存在」⁽³⁴⁾なのである。人は、愛する人とめぐり会うと、その人を、目的のための単なる手段とみなすことが不可能になる。人間の性は、単なる性という行為以上のものである。性を越えた何か、その身体的表現、愛の身体的表現である限りにおいて、性は性以上のものである。性が「この役割を果たしている限り、それは真に価値ある経験」⁽³⁵⁾なのである。

〈「性」は成熟しながら、人間的なものになっていく〉

「愛」はその本質からして人間的な現象であるが、しかし他方で「性」は、発展していく過程のなかで、人間的な「性」に成熟してゆく。フロイトは、性の「対象」を、性を行う相手であると見、性の到達点は「性的緊張の緩和」であるとみている。しかしフランクルはこれでは、神経症的なセクシュアリティを意味しているにすぎないと、フロイトを批判している⁽³⁶⁾。真に成熟した人間にとって、パートナーは、けっして「対象」ではない。成熟した人間は、パート

ナーの中に、もう一人の人間存在、人間性そのものを見出ししているのである。

〈愛する人が唯一無二の存在であることに気づくことの重要性〉

愛する人が唯一無二の存在であることに気づけば、お互いはかけがえない存在になる。これが崩壊すると、人間的墮落が始まり、人間の性的成熟における後退の徴候となる。愛に根ざした「性」だけが、真に価値があり充足感を与えるがゆえに、それを欠いている人の性生活の質は低下せざるをえない。「性」の質の欠如を量によって補おうとすることから、とどまることを知らない激しい「性」の刺激が氾濫することになる⁸⁶。われわれはこれを「性」の退廃として、現代文化のなかで目の当たりにしている。現代人には、何かをしなければならぬという「伝統」や「価値」が喪失されてしまった。その結果として、広範囲に広がる「実存的空虚」という深刻な問題が発生してしまったのである⁸⁷。

〈「実存的空虚」の中で、性的なりビドーは肥大化してゆく〉

この「実存的空虚」の中で、性的なりビドーは肥大化してゆく。そのため、「性」が人間の生活に重要であるというよりも、むしろ、快樂のために存在すると誤解されがちである。「性の脱人格化」は、「実存的フラストレーション」、つまり生きる意味の探求が欲求不満を起こしている徴候である⁸⁸。生きる意味の探求にフラストレーションを感じるほど、人間は「幸福の追求」に一心不乱になってしまふ。「この幸福の追求が、意味の探求のフラストレーションから

生じている場合、それは陶酔と麻痺に陥り、結局自滅的でしかない。なぜなら幸福とは、自己超越性、つまり果たすべき努めや愛すべき人間への献身を、その人が貫き通したその結果としてのみ、訪れてくるものだからである⁸⁹。(傍点筆者)

〈人は性の「悦び」を目指すほど、その「悦び」を見失ってしまう〉

フランクフルは、「性」の悦びについて、人はそれを目指せば目指すほど、「悦び」を見失ってしまうと言う。神経症のある男性は「自分の性交能力に関心を向ければ向けるほど、不能⁹⁰」になってしまう、女性も同じ不感症に陥ってしまいがちであると、性神経症の事例をフランクフルは指摘している。ここでもわれわれは、「愛」とは、「自己超越性」という人間的現象の一つであることが傍証できるのである。人間は「性」という悦びの快樂それ自体を求め始めると、支障をきたすことがある。「性」という悦びもまた、快樂や幸福を引き起こす結果なのであり、それ自身を追い求めることはできないものなのである。

〈「享楽」そのものへの無理な努力は失敗する〉

「性生活」の領域においても、現代社会では、いたるところで人間の「幸福」の努力が誤った方向で展開されている。そこでフランクフルは言う。「享楽そのものへの無理な努力がいかに失敗するのを常とするかということである。(中略)カント(Immanuel Kant, 1724-1804)が人間は幸福であることを欲するべきではなく『幸福にふさわしく』あることを望むべきであると言ったのに対してわれ

われも人間は本来幸福であることを欲するのではなくて、むしろ幸福であることの根拠を欲するのである。(傍点筆者)

第四節 「働く」と「自己」

一、労働の意義

〈人間の職業生活は「自己保存衝動」を越えたものである〉

一般に、「働くこと」には「生活の基盤、社会的分業への参加、自己実現」という三つの意味があると理解されている。しかし一方でフランクフルトは、人間の職業生活は「自己保存衝動」などを本質的に越えたものであると考えている。フランクフルトが特に強調するのは、個人の独自性と一回性に基づく使命感であり、自己の好悪による欲求ではない。

〈いかなる優れた職業も存しない〉

創造的な「価値」の実現が生活の使命の前面に出ている限り、その人の「充足」の領域は、職業的な活動と一致しているものである。一般に、一人の人間の意味と価値は、共同体に対する業績に付随しているのであり、具体的な職業それ自身に対してではない。したがって「或る一定の職業だけが人間に価値充足の可能性を与えるわけではない。その意味ではいかなる特別にすぐれた職業も存しない」(傍点筆者)のである。そこでわれわれにとって重要なことは、「具体的な職業それ自身ではなくて、われわれの実存の独自性を形

成する人格的なもの、特殊なものが職業活動のうちにあられて生命を有意義にするかどうかの問題なのである」。

〈人間の人格や使命感は独自のかつ一回的なものである〉

生の意味は、価値の実現であり、その価値は世界に対するわれわれの行為による応答である。つまり、生の意味は、個人的な使命のなかに表出する具体的な義務を果たすことであり、一般的には「職業活動」を通してみられる。人間の人格や使命感は独自のかつ一回的なものである。個人の独自性は協同体(世界・社会という意味)との関係で形成されるため、その使命は職業活動を通して達成されることが望ましい。しかし「価値」を実現することは、職業活動だけにとどまらず、ボランティア活動や余暇活動を通して、人間に価値充足感を与えるのである。その意味で特にすぐれた職業があるわけではない。

〈罪はその人間にあり職業にはなんらの罪はない〉

フランクフルトによれば、神経症的な人間は、もし自分が「他の職業」についていたならば、今より以上の使命を果たしていたらと主張するが、それは職業的労働の意味を誤解しているか、自己欺瞞のどちらかにすぎないと断じている。職業はわれわれに充足感を与える機会を提供するだけである。仮に具体的な職業によって充足感が与えられない場合、罪はその人間にあり職業にはなんらの罪はない。われわれの「実存の独自性を形成する人格的なものが職業活動のうちにあられていない」だけのことなのである。

二、働くことと「自己超越」

〈現代の若者の「新しい労働観」〉

現代の若者の「新しい労働観」や「就業意識の変化」とは何だろうか。梶川哲司が経済企画庁編『国民生活白書』（平成七年版）を調査した結果の解釈に従えば、それは、「わたしの気に入った仕事」や「自分のやりたいことの実現」にこだわる労働観であるという。

この労働観は、自己の欲求実現に最高の優先順位を与えたいという現代社会を反映したものに他ならない。もちろん自分の労働を意味あるものにしたという願いは悪いものではないが、現代の日本では、「わたし」と「やりたいこと」への過度なこだわりがみられるのみならず、こうしたこだわりが、「個性的な自己実現」と表現され、皮肉にも好意的に受け止められる傾向にある。⁴⁸しかしこうした「狭義の自己実現」は、自己の欲求の無限の解放を求め、やがて快樂主義と利己主義に陥る危険性を孕んでいる。

〈「自己超越」には、自己を引き渡す対象（仕事）が必要とされる〉

フランクフルトは、現代社会のこうした過度に歪められた「狭義の自己実現」に対して、真の「自己実現」は人間のもつ「志向性の結果」であると理解している。つまり、真の自己は「自己超越性」によって実現されるというのがフランクフルトの確信なのである。この「自己超越性」には、自己を引き渡す対象と状況が必要とされ、それらを提供するものとして「仕事」があり、その仕事を保障するものとして「職業」が位置づけられている。こうして働くことの意味

が明瞭になってきた。すなわち「働くとは仕事をすることであり、仕事をするということは、『そのつどのなすべき事にさえ集中すること』すなわち『我を忘れて事そのものに仕えること』である。そして結果的に自己が実現される」⁴⁹。

〈夏目漱石の「他人本位」〉

夏目漱石（1867-1916）もまた彼の著作のなかで、「働く」ということについて「自己超越的な哲学」を展開している。すなわち、「職業」というものは要するに人のためにするものだという事に、どうしても根本義をおかなければなりません。人のためにする結果が己のためになるのだから、元はどうしても他人本位である。（中略）要するに職業と名のつく以上は趣味でも徳義でも知識でもすべて一般社会が本尊になって自分はこの本尊の鼻息を伺って生活するのが自然の理である」⁵⁰。人のためにする結果が自己のためにもなるという視点が、仕事のもつ自己超越的側面による自己実現を示唆している。仕事は「他人本位」にするものだというのが漱石の理解なのである。⁵¹

〈「失業神経症」という概念を作り出したフランクフルト〉

こうした現状のもとで、人間の精神的次元が「職業」を通して実現されてゆくことを考えた場合、必然的に「実存的欲求不満」や「実存的空虚」を作り出してしまうことは明確に理解できよう。二一世紀初頭の現代社会のなかで、世界的経済不況の長期化や失業、企業の倒産などの結果、無気力と空虚な気分が人々の心の内にます

まず拡散し始めている。フランクルは既に数十年前に「失業神経症」という概念を作り出して今日の精神的病巣をめぐりに予言し、この「失業神経症」への対策として「自己超越性」を核とする上述の「職業の価値」について正しく人々に示すことの重要性を指摘したのである。⁽⁸²⁾

〈職業の価値を正しく人々に示すことの重要性〉

「労働を生活のための必要条件と考える神経症的な態度と、労働を意義ある生活目的達成のための手段と考える正しい態度とのあいだには、大きな相違がある⁽⁸³⁾」ことをフランクルは明確に強調したのである。たとえばフランクルは、最も非人間的でいっけん、意義が見出せないような仕事でさえ、労働者が創造的な価値と意義の可能性を発見できるように気づかせることが重要であると考えている。すなわち「天職」としてそれを自分の仕事として打ち込むことによつて、その仕事に価値が生まれ始め、その人の人格も高められるとフランクルは説くのである。

〈自分を自分自身の上だけに築く人間存在は地盤を喪失する〉

こうした上述の職業観からも、われわれは「本当の自己実現や生きがいは、直接的な自己主張によつてではなく、自己以外の他の者または物に我を忘れて専念する⁽⁸⁴⁾という迂路を通つてのみ達成される」というフランクルの考え方が、いかに正しいものであるかがうかがい知れるのである。そして最後にフランクルは言う。「われわれが自分の不安から自由になれるのは、自己観察やまして自己反省に

よつてではなく、また自分の不安を思いめぐらすことによつてもなく、自己放棄によつて、自己を引き渡すことによつて、そしてそれだけの価値ある事物へ自己をゆだねることによつてである。これこそあらゆる自己形成の秘密である」。(傍点筆者)

フランクルはまたカール・ヤスパース (Karl Jaspers, 1883-1969) を援用し、自分を自分自身の上だけに築く人間存在は地盤を喪失し、人間が人間になるのは、いつも自己を他者に委ねることであるという彼の信条を紹介している。まさにこのヤスパースの思想こそ、フランクルの鍵概念である「自己超越性」の正当性を傍証するものとなっている。⁽⁸⁵⁾

註

- (1) Viktor Emil Frankl, *THE WILL TO MEANING*——Foundations and Applications of Logotherapy. 1969, 1988. p.38. (以下はTWTMと略記する) フランクル著、大沢博訳、『意味への意志——ロッセラピイの基礎と適用——』、ブレーン出版、一九七九年四月一〇日、初版、四四頁。(以下、『意味への意志』と略記する)

- (2) 山田邦男著、『生きる意味への問い』、佼成社、一九九九年四月、第一刷、八頁。

- (3) V.E.Frankl, TWTM, p.34. 『意味への意志』、四〇頁。

- (4) V.E.Frankl, *Das Menschenbild der Seelenheilende. Drei Vorlesungen zur Kritik des dynamischen Psychologismus.* Hippokraties-Verlag, Stuttgart 1959. S.57f. フランクル著、宮本

忠雄・小田晋訳、『精神医学の人間像』(著作集⑥)、『みすず書房
一九七四年、第一〇刷、五五～五六頁。

- (5) Cf., V.E.Frankl, TWTM, p.33. 『意味への意味』 三九頁参照。
- (6) V.E.Frankl, TWTM, p.34. 『意味への意味』 四〇頁。
- (7) Cf., V.E.Frankl, TWTM, p.34. 『意味への意味』 四二頁参照。
- (8) Cf., V.E.Frankl, TWTM, p.35. 『意味への意味』 四二頁参照。
- (9) V.E.Frankl, TWTM, p.35. 『意味への意味』 四二頁。
- (10) V.E.Frankl, TWTM, p.35. 『意味への意味』 四二頁。
- (11) V.E.Frankl, TWTM, p.36. 『意味への意味』 四二頁。
- (12) Cf., V.E.Frankl, TWTM, p.38. 『意味への意味』 四五頁参照。
- (13) V.E.Frankl, TWTM, p.38. 『意味への意味』 四五頁。
- (14) Cf., V.E.Frankl, TWTM, p.38f. 『意味への意味』 四五頁参照。
- (15) V.E.Frankl, TWTM, p.40. 『意味への意味』 四七頁。
- (16) Cf., V.E.Frankl, TWTM, p.40f. 『意味への意味』 四七頁参照。
- (17) 浅野順一、松田明三郎他編、『旧約聖書略解』 日本基督教団出版
局、一九七七年四月二〇日、三〇版、三三三頁参照。
- (18) 日本聖書協会 新共同訳『聖書』 一九八七年、列王記上 三章一
〇節～一四節、六一四頁。
- (19) Cf., V.E.Frankl, TWTM, p.41. 『意味への意味』 四八頁参照。
- (20) V.E.Frankl, *Arztliche Seelsorge: Grundlagen der Logo-
therapie und Existenzanalyse*, 1952, S.103. (以下、AS と略記す)
フランクル著、霜山徳爾訳、『フランクル著作集② 死と愛
——実存分析入門——』、『みすず書房、一九七六年、改訂版第一九
刷、一四八頁。(以下、『死と愛』と略記する)
- (21) Cf., Donald F. Tweedie, *Logotherapy and the Christian Faith*,
Baker Book House, 3 Auflage, Grand Rapids, Michigan,

1961-1972. p. 137. (以下、LCF と略記する) ドナルド・トワイ
ディ著、武田健訳、『フランクルの心理学』、みくに書店、一九六八
年、第一刷、一九四頁参照。

- (22) V.E.Frankl, ASS.103. 『死と愛』 一四八頁。
- (23) Cf., Donald F. Tweedie, LCF, p.137. 『フランクルの心理学』 一
九五頁参照。
- (24) Vgl., V.E.Frankl, ASS.103. 『死と愛』 一四八頁参照。
- (25) V.E.Frankl, ASS.103. 『死と愛』 一四八～一四九頁。
- (26) Vgl., V.E.Frankl, ASS.103. 『死と愛』 一四九頁参照。
- (27) Cf., Donald F. Tweedie, LCF, p.137. 『フランクルの心理学』 一
九五頁参照。
- (28) 山田邦男著、『生きる意味への問い』 一九三頁参照。
- (29) 山田邦男著、『生きる意味への問い』 一九七頁。
- (30) V.E.Frankl, ASS.130. 『死と愛』 一八五頁。
- (31) Cf., Donald F. Tweedie, LCF, p.138. 『フランクルの心理学』 一
九六頁参照。
- (32) Viktor Emil Frankl, *The Unheard Cry for Meaning: Psycho-
therapy and Humanism*, Simon and Schuster, 1978, p.79. (以下、
TUCM と略記する) フランクル著、諸富祥彦監訳、『生きる意
味を求めよう』 春秋社、一九九九年一〇月二〇日、第一刷、一三
一頁。
- (33) V.E.Frankl, TUCM, p.80. 『生きる意味を求めよう』 一三三頁。
- (34) V.E.Frankl, TUCM, p.80. 『生きる意味を求めよう』 一三三頁。
- (35) Cf., V.E.Frankl, TUCM, p.81. 『生きる意味を求めよう』 一三四
頁参照。
- (36) Cf., V.E.Frankl, TUCM, p.81. 『生きる意味を求めよう』 一三五

頁参照。

- (37) Cf. V.E.Frankl, TUCM, p.82. 『〈生きる意味〉を求めて』 一三六頁参照。

(38) V.E.Frankl, TUCM, p.82. 『〈生きる意味〉を求めて』 一三七頁。

(39) V.E.Frankl, TUCM, p.83. 『〈生きる意味〉を求めて』 一三九頁。

- (40) V.E.Frankl, TUCM, p.83. 『〈生きる意味〉を求めて』 一三七～一三八頁。

(41) V.E.Frankl, AS.S.126f. 『死と愛』 一七九～一八〇頁。

- (42) 梶川哲司著、山田邦男編、『フランクルを学ぶ人のために』、世界思想社、二〇〇二年五月二十日、第一刷、一三八頁参照。(以下、『学ぶ人』と略記す。)

(43) V.E.Frankl, AS.S.92. 『死と愛』 一三三頁。

(44) V.E.Frankl, AS.S.92. 『死と愛』 一三四頁。

(45) 梶川哲司著、『学ぶ人』、一三四頁参照。

(46) 梶川哲司著、『学ぶ人』、一三四頁参照。

(47) 梶川哲司著、『学ぶ人』、一三四頁。

(48) 梶川哲司著、『学ぶ人』、一三九～一四〇頁参照。

(49) 山田邦男著、『生きる意味への問い』、一二二頁。

- (50) 夏目漱石著、『道楽と職業』『私の個人主義』、講談社学術文庫所収、一九一一年、三〇～三二頁。および梶川哲司著、『学ぶ人』、一四七頁参照。

(51) 梶川哲司著、『学ぶ人』、一四七頁参照。

- (52) Cf. Donald F. Tweedie, LCF, p.139. 『フランクルの心理学』 一九八頁参照。

(53) Donald F. Tweedie, LCF, p.139. 『フランクルの心理学』 一九八頁。

(54) 山田邦男著、『生きる意味への問い』 八頁。

- (55) V.E.Frankl, *Theorie und Therapie der Neurosen*. Einführung in Logotherapie und Existenzanalyse. 4 Auflagen, 1956 - 1975. Uni-Taschenbücher 457. Ernst Reinhardt, München-Basel, S.95. フランクル著、霜山徳爾訳、『神経症Ⅰ——その理論と治療——』(著作集④)みすず書房、一九七三年、第九刷、一七六頁。
- (56) Vgl. V.E.Frankl, *Theorie und Therapie der Neurosen*. S.95. 『神経症Ⅰ』 一七六頁参照。